

手話で盛んに通い合う

# 「心身剛健」交流楽しむ

調理班の西川浩子さん

京田辺市にある「さんさん山城」（新免修施設長、藤永実管理）は2011年の開所以来、聴覚障害者の就労支援をはじめ、知的障害がある若年利用者も年々増えている。地元特産物を栽培、収穫する農業に利用者が取り組む「農福連携」を実践。喫茶や縫製、販売などで持ち味を発揮し積極的に活動する利用者と職員の日々、現在に至る「人生賛歌」をシリーズで綴る。



西川浩子さん(85)

京田辺市田辺北里は、朝は歩いて自宅からさんさんまで通い、帰りは送迎車に乗って家路へ。80代半ばにして、今なお週5回は出勤する剛健な人だ。

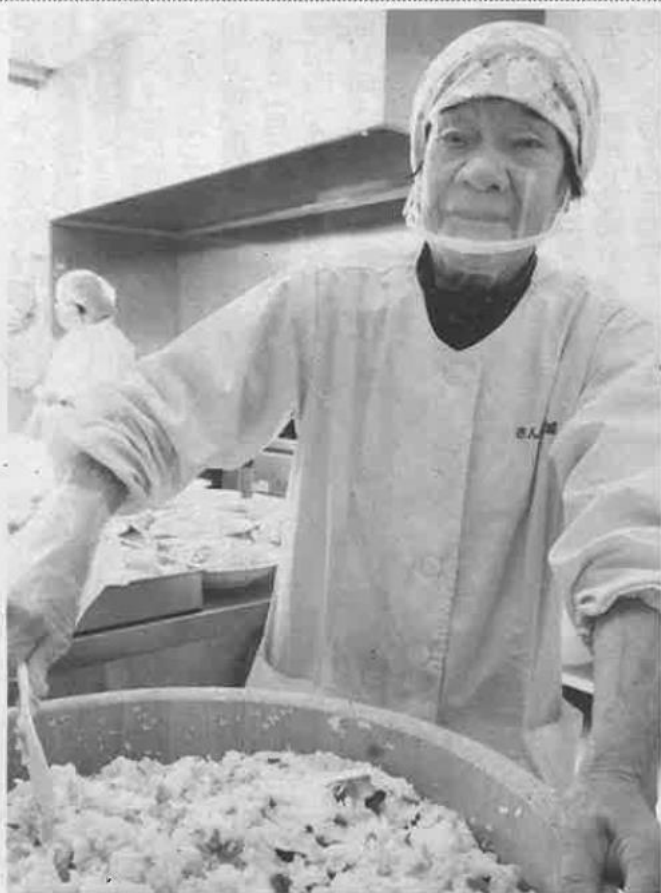
吉野山に近い奈良で4人きょうだいの末っ子

として生まれ、小学1年。中学3年までの9年間を聾学校の寄宿舎で過ごした。高校は実家から電車で奈良聾学校まで2時間掛けて通学して卒業。その後、和裁を2年間学び、大阪にある会社に就職し、住み込みで9年半勤めた。

社内には、同期入社を含む4人の聾者がいて、「交流があり、楽しく過ごした」。結婚を機に退職すると、田辺中心部の旧村で専業主婦と

「主人も聾者。あまり活動的ではない」と紹介する夫は数年前、に転倒し、約3カ月間の入院生活を送った。丸1年休んだ西川さんだが、友人と通つパッチワーク教室、マスクをして練習に励む卓球パ

「全然しんどいと思わない。こはいっぱい喋れるし、楽しい。おうちにはぼつととしてダメ。交流するのが好き」と今の生活ぶりがしっくりくる様子。同じく調理に携わる谷山富美子さんとは家族ぐるみの付き合いがある。「結婚した頃、通訳なしで茶摘みを行った。不便だった」と述べ、手話で盛んに心を通わせるさんさんの時間を日々、愛おしみ、充実させている。



モなどの定植時期には畑に足を運んでいる。「どっちも楽しい。屋外は空気がよく、胸を張る。新免施設長は「よつ食べはる。何でも好き」と、健康の秘訣を明かす。